

～デフリンピックから広がる共生社会～

手話の花咲くおおいそ

<12月3日～12月9日は障害者週間です>

大磯町では、障がいの有無で分け隔てるのではなく、共に尊重し、助け合える社会を目指しています。9月に開催した映画「咲む」上映会とデフリンピック選手の早瀬憲太郎さんらの講演の様子から共生社会への手がかりを見つけていきましょう。

福祉課 内線△354



デフリンピックを知っていますか？

デフリンピックは国際ろう者スポーツ委員会（ICSD）が主催し、4年毎に開催されています。国際的な「きこえない・きこえにくい人のためのオリンピック」であり、デフとは英語で「耳がきこえない」という意味です。1924年にパリで第1回大会が開催され、今年東京で行われた第25回大会は100周年の記念すべき大会であり、日本では初めての開催となりました。

デフリンピック競技では、スタートの音をライトの点灯に変更したり、審判の発声を旗で知らせる方法にして、視覚的な工夫が行われるなど、ろう者の方が力を発揮できるよう工夫されています。



参加者的心に響いた映画「咲む」上映会と講演会

大磯町では第25回夏季デフリンピック競技大会東京2025の機運醸成として、第1部にろうの女性の人生を描いた映画『咲む』の上映、第2部ではデフリンピック自転車（ロード）競技選手で同映画の脚本・監督を務めた早瀬憲太郎さん等の講演会を行い、町内外から延べ200名の方が参加されました。また、講演会の最後には、障がいをお持ちの方が通所している「地域支援センターそしん」と「そだちサポートMana」の利用者が作成した贈り物と、会場の皆様のエールが書かれた色紙をそれぞれお渡しました。手話における拍手は音を出す代わりに両手を広げて上に上げ、手首を回して手をひらひらと動かすことで表現し、このひらひらの動作は視覚的に拍手を表しています。当日は会場全体が一体となり、視覚的に感情を表現することができました。

障がいの有無に関わらず、活躍している人がいます。お互いに尊重し合える社会を目指していきましょう。



私は24年間ろう学校の早期教育相談指導員を担当しています。両親は、自分の赤ちゃんの耳が「きこえない」と分かった時にショックを受けると思いますが、赤ちゃんが生まれたことに対して「おめでとう。ろう者の世界でも楽しいことが一杯あるよ」と伝えています。映画『咲む』は前向きになるような映画として製作しましたが、良い感想も悪い感想もあり、次の映画製作に活かしていくこうと思っています。映画の中にメッセージを入れるのではなく、気持ちを込めて個人の感想を感じてもらいたい。きこえる人、きこえない人で力を合わせてつくり上げていくことが『共生社会』の縮図であり、その先には『共生社会』という言葉をわざわざ使わなくても、当たり前であるような『共生社会』になってほしいと願っています。



早瀬憲太郎さん



手話から始める共生社会

手話はろう者の言語であり、コミュニケーションのひとつです。身近な手話から共生社会への一歩を踏み出しましょう。

私たちにとってあたりまえのことが、ろう者にとって困難であることもあります。手話をきっかけに、ろう者の生活や文化を理解しましょう。

